

原本番号 平成六年民第一四号の六

速記 録 (平成八年七月二五日第一五回口頭弁論)

事件番号 平成四年ワ第三四九号等

原告本人氏名 梁 錦 徳

原告ら代理人(山本)

甲第一三号証を示す

1 これは、あなたが話されたことを李金珠さんが日本語で書いた陳述書ですね。

はい、間違いございません。

2 あなたは、李金珠さんに記憶のとおりのことを話されましたね。

そのとおりでございます。

3 あなたは一九二九年一月三〇日生まれということですから、戸籍上は一九三一年になってますね。

そのとおりです、戸籍上は三一年です。

4 本当の生年月日は一九二九年ということでもいいわけですね。
このとおりでございます。

5 あなたは、一九二九年に韓国で生まれたんですけれども、韓国のどこでお生まれになりましたか。

韓国の羅州の中央道で出生いたしました。

6 あなたが幼いときの御両親の仕事は何でしたか。

当時は大変貧しかったので、母の実家の土地を小作として耕して生活をしておりました。

7 きょうだいは何人いらっしゃいましたか。

お姉さん四人、お兄さんが一人で、一番末っ子になります。

8 六人きょうだいの末っ子ですね。

全部合わせて六人になります。

9 あなたが勤労挺身隊に行くように勧誘を受けたのはいつのことですか。

六年生のときです、始まったばかりで、五か月ぐらいだったと思います。

10 それは、一九四三年のことですか。

そのとおりだと思います。

11 四三年の五月ということですね。

そうです。

12 そうすると、あなたはそのとき満一三歳だったということになりますか。

ええ、一三歳、満で一三歳です。

13 六年生と言われましたけれども、それは何という学校のですか。

羅州公立国民学校です、小学校は国民学校といひます。

14 あなたに勤労挺身隊に行くように勧めた人はだれですか。

最初は校長先生です、それから憲兵隊お二人が入ってきまして勧誘いたしました、これは学校の教室です。

15 学校の教室に、校長先生と憲兵が入ってきたということですね。

そうです。

16 この憲兵の名前は分かりますか。

憲兵へ向かって校長先生がコンドウさんと呼んだから、コンドウさんじゃなかろうかということでございます。

17 その憲兵はどんな姿をしていましたか。

背が高く、大変立派な体格のがっちりした人でした、確かに帽子の周りは黄色で、赤い星のマークがあって、肩には憲兵という肩書が書いてありまして、長い大きな日本刀を下げておりました。

18 その日本刀を下げた姿で教室に入ってきたということですか。

ええ、そのとおりでございます。

19 このとき以外に、憲兵が教室に入ってくるということはあったんですか。

ええ、何回か入ってきましたけれども、入ってくるときは必ず校長先生と一緒に入ってまいりました。

20 そうではなくて、この挺身隊に誘うとき以外に憲兵が教室に入ってくるということは、それまでもあったんですか。

いや、その以外はございません。

21 さて、その憲兵と校長先生と一緒に入ってきて、校長先生は何と言いましたか。

校長先生から、憲兵隊のそのコンドウさんだと思いますが、その方に付いていきますと、女学校も行けるし、お金ももうけるし、好きないい着物も着せるし、それから食べるものは上等なものを食べて、帰ってくる

ときには家が一軒買えるぐらいの金持ってこられるぞというように校長先生が説明してくれました。

22 そのコンドウという憲兵は何と言いましたか。

隣で校長先生と同じようなことを言っておりました。

23 校長先生の名前は記憶されていますか。

正木校長先生、正木という名字だと思いますね。

24 それで、その校長先生とその憲兵の言ったことをちよつと一つ一つ確認したいんですけれども、日本に行くんだということは聞きましたね。

日本に行くということは聞きました。

25 日本のどこに行くかということは聞きましたか。

それは全然聞いておりません。

26 何という会社で働くんだということは聞きましたか。

そういうことも全然聞いておりません。

27 行く先が工場だということは聞きましたか。

工場に行くということも聞いておりませんが、日本に行けば好きなお

りいいものを着て、金もうけができて、好きなことができるからということだけ聞きました。

28 働きに行く、日本で働くということは聞いたんですね。

現地に行っただけからは分かりましたが、教室では聞いておりません。

29 働きに行くということも聞いていないんですか。

ええ、確かに働くということは聞いてないような感じがします。

30 校長先生は、日本に行って働けばお金が稼げると、こう言ったんではないですか。

ええ、そのとおりでございます。

31 一応、働くということは分かってたんですね。

工場というのは知ってないんですけども、働くということ、働けば金もうけになるんだということは校長先生から聞きました。

32 そうすると、働くということは聞いたけど、仕事の内容は知らなかったということですか。

どこに入って何をするかとは全然聞いておりません。

33 給料は幾らもらえるということは聞きましたか。

幾らくれるとも聞いておりません、ただ、行って働けばたくさん金はもらえるとということだけ聞きました。

34 何時から何時まで働くというようなことは聞きましたか。

その前は、何時から何時伺っておりません、現地に行って初めて知りました。

35 校長先生と憲兵の話を聞いて、あなたはどう思いましたか。

幼い心で、女学校に行けるということと帰りにたくさん金を持って帰られるという、ただそれだけにあこがれました。

36 そうすると、あなたとしては、その誘いというのはいい誘いだと思っただけですか。ただ訳も分からないんですけれども、ただ女学校に行ってやるんだという、これで有頂天になってしまいました。

37 あなたは、そのまま韓国にいたら女学校には行けない境遇だったんですか。

一番末っ子で、頭がよかったと思います、もし日本に渡らなければ多分女学校に行ったんではないかと思えます。

38 学校に行くお金はあったんですか。

末っ子で頭がよかったので、幼い気持ちとして、一生懸命やれば女学校に行けるだろうと、お父さんが前一べんおっしやったことがあります、勉強だけ一生懸命しなさいということは、後にそういう話をしておけばということだったから、多分勉強すれば行けるんじゃないかと、幼い心でそういう気持ちをたしか持ったような気がいたします。

39 それで、あなたは行きたいというふうに先生に申し出たわけですね。

行きたいと思いましたが、行くと言いました。

40 あなたのほかに行きたいと言った人は何人ぐらいいたんですか。

全体が手を挙げてしまいました。

41 クラス全員ということですね。

全員です。

42 それで、行く人はどうやって決めたんですか。

全部手を挙げたら、全部手を下ろせと、で、担任の先生といろいろお話をなさったらしくて、頭がよくて体の丈夫な人を選ぶということで、一応一〇名と言ったけれども、今考えてみたら九人ですね、六年生全体の

中で九人を選ばれました、その中の一人が私です。

43 担任の先生が九人を指名したということですね。

憲兵と校長先生と同じ席の中で、その同じ教室で指名したそうです。

44 担任の先生の名前は覚えておりますか。

マスモト、女の先生でマスモト先生という人です。

45 そのときに梁さんも指名されたわけですから、両親の許可を取ってきなさい、許しを受けてきなさいということは言われませんでしたか。

一応担任の先生からは両親にはちゃんと行ってくれということ、うちに帰って言ったたら、火がつくようにびっくりして反対いたしました。

46 御両親とも反対されたわけですね。

もう、父母ならぬ、きょうだい、身内まで全部反対しました。

47 先生から、日本に行くためには親の判こが必要だと言われませんでしたか。

両親に言うたら火がついたように怒られました、私は死んだと思えば日本にやらんということ、たまたま両親が就寝中に棚の上に入れてあった印鑑を盗み出したということです。

48 親が寝ている間に印鑑を持って、で、だれに渡したんですか。

印鑑を担任の先生に上げましたら、担任からは庶務室、校長室と思いましたが、校長室に持っていかれて、どこでどう押したかは分かりません。

49 そうすると、あなたは、その印鑑で何の書類に判を押したかは知らないということですね。

もちろん内容も知らないし、その書類を見せてもくれませんでした。

50 あなたと一緒にいったほかの友達も親の判をどのようにして押したか、聞いてますか。

ほかの友達にも聞いたら、皆反対するので、同じように、なるべく分からないように親の目を盗んで持ってきたのだと思います、全員です。

51 判を持って行って押してしまったということを、日本に行く前に親に打ち明けましたか。

もちろん後でどうせばれることですから、一応こうしてお父さんの目を盗んで判を押しましたと言ったところが、大変反対をして、とてもじゃない、とんでもないということになったんですが、憲兵隊が来たの

で、もし判こを押して行かないとなれば、これは警察に絶対逮捕される、警察に留置される、捕まっていくなので、今更判こを押した以上どうにもできないということに納得させようと思ったんですが、出発の出発まで反対をし続けておりました。

52 判こを押したのに行かなかつたら、お父さんが警察に捕まるぞというようなことを、だれかが言ったんですか。

校長先生、並びにその憲兵隊の方から、印鑑を押して行かなかつたら全部警察に捕まるということを言われて怖くなりました。

53 あなたとしては、そのとき日本に行くことについてどんな気持ちを持っていたかか。

私が日本に渡れば、まずお父さんは捕まることもないし、ただ、本人は、お父さんがあんなに反対しておったけれども、有頂天になって飛び上がるばかり喜んでおりました。ただ、私が日本に行ってしまったえば、お父さんは警察に捕まらんで済むだろうということを思っていました。

54 有頂天になっていたということは、学校に行けるからということですか。

幼い気持ちで、女学校にやるといふことが大変うれしくて、そのことが有頂天になったそうです。

55 あなたは、そのとき日本がアメリカと戦争してるということを知っていましたか。六年生に上がったばかりで、日本が、アメリカという国、何の国かアメリカも知らないし、もちろんアメリカの兵隊がどんな兵隊か、アメリカ人も知らないですから、全然分かっておりません。

56 そうすると、日本に行けば空襲に遭うかもしれないということももちろん想像はしてなかったんですね。

日本に来てからは空襲警報受けましたけれども、韓国では全然知りませんでした。

57 出発する日、羅州の駅から電車に乗ったわけですね。
乗りました。

58 羅州から一緒に汽車に乗った人は何人ですか。
一年先輩、二年先輩、三年先輩、羅州からです、二四名になります、二三名。

59 羅州から汽車に乗って麗水でみんなが集まったようですけれども、麗水には何人ぐらいいましたか。

麗水に着いて、大体三十二、三名ぐらいじゃないかと思っています。

60 麗水で木浦とか光州とかいろんなところから来た人が集まったんですね、その合計が何人ですか。

一三八名と報告をしたんですが、約一四〇名と言ったほうが正解と思います。

61 それは、全部女性ですね。
全部女性でした。

62 年は、一番上の人が何歳ぐらいで、一番下の人は何歳ぐらいでしたか。

羅州からは、二年、三年先輩ですから、十五、六歳ぐらいのが一番大きかったんですけれども、そうじゃない、例えば、麗水とか光州とか、そういうよそから来た人たちは結構大きな娘もおりました。

63 一番年が上の人で何歳ぐらいでした。

一七歳ぐらいじゃないかと思っています。

64 一番下の人は。

一三歳以下はおりません、六年生ですから、一番下が一三歳。

65 一番下が六年生ということですか。

そうです。

66 あなた方を麗水まで連れていった人はだれですか。

一人の憲兵がずっと引率してくれました。

67 それは、さっき出てきたコンドウという憲兵ですか。

そのとおりです。

68 羅州から、学校の先生と一緒にいらっしゃるじゃありませんか。

親が反対するし、泣いて、もちろん子供もやっぱ親が泣けば一緒に泣いたと思いますが、それが心配になったので、女の先生が一人、実際はよく、付いてくるというのが分からなかったんです、結果的に、要するに、来てみたら、女性の先生、これは韓国人だったそうですが、この方が一人見えておりました。

69 その先生の名前は覚えていますか。

韓国名字は孫ですが、通称、創氏改名して松山とっております。

70 創氏名が松山先生という女の先生ですか。

ええ、女の先生です。

71 この先生が何のために付いてきたかということを知りましたか。

ただ、一緒に来たただけであって、内容は存じ上げておりません。

72 校長先生から行けと言われたという話は聞きませんでしたか。

校長先生から一緒に付いていけと言われて、その松山先生、一緒に来たということですよ。

73 何のために一緒に付いてきたんですか。

内容はよく分かりませんが、我々が泣いたり、いろいろ、泣いて悲しかったりするものですから、多分、校長先生から一緒に行ってあげれというようなことじゃないかと思えます。

74 松山先生が、行き先がどこか確かめてこいと校長先生から言われて来たという話は聞いていませんか。

それはよく分かりません。

75 あなたは、麗水から下関に渡って、下関から汽車に乗ったということのようですが、目的地が名古屋だということはいつ知りましたか。

名古屋に到着して、どこ行ったか分からない、とにかく連れていかれるものですから、着いて降りたところが名古屋と初めて、名古屋に着いて名古屋と分かりました。

76 行く途中で、松山先生に、行き先はどこかということを知ったことはありませんか。

ただ、日本に渡るということでもううれしくてたまらなくて、飛んで回ったもので、松山先生には、我々どこに行きますかということは聞いておりません。

77 行き先の工場が三菱という会社だということを知ったのはいつですか。

到着して一つ一つ教えてくださったので、そこで初めて分かりました、名古屋へ到着して。寮か寄宿舎に入ってからそれを伺いました。

78 名古屋で、三菱名航道徳工場というところで働いたわけですね。

ええ、その会社に入りました。

79 そこで、最初にどのようなことをさせられましたか。

旋盤の横面の小さい機具類をやすりで一生懸命正確に磨けということ
先に習わされました。

80 それは、工場に入ってからですね。

ええ、工場に入ってからです。

81 その前に授業のようなものを受けたことはありませんか。

今だったら講堂のような感じがいたします、それが女学校だなという感
じもいたしましたけれども、黒板に飛行機の部品、いろいろとそういう
飛行機の模型、そういうものを説明書を書いて、毎日、研修を約二週間
続けました。

82 講堂で、飛行機についての話を聞いたということですね。

だから、そのとき初めて説明してくれて、一生懸命まじめに勉強いたし
ました。

83 あなたは、そこがどういふところだと思っていたんですか。

講堂のようであったので、ああ、ここでそのまま女学校に行けるんだな

ということ、工場に行くとか何とかじゃなしに、このまま勉強して女学校に行くんだとしか思ってたそうです。

84 このまま女学校に行くんだと思って熱心に話を聞いたと。

そういうことです。

85 で、先ほどの旋盤の台でやすりで部品を削ったというのは、その後のことになり
ますね。

ええ、そのとおりです。講習を受けて、工場に行って、それからやすりをかける仕事をいたしました。

86 その後どのような仕事をしましたか。

だから、二週間ほどやすりの擦り方で研修終わりましたら、今度アルコールなどで部品をきれいに磨き上げたり、整理をする、そういう仕事をいたしました。

87 アルコールで部品を洗う仕事。

(うなずく)

88 それから、ペンキを塗る仕事も。

アルコールで部品などいろいろ付属品をいつも消毒、洗っていたら、見込んだかどうか知りませんが、あんたはペンキを塗ってみらんかということではペンキ塗りをさせられました、これはプロペラとかさびがこないところへ主にペンキ塗りをして、片手じゃとても弱くてできなかつたので、両手でつかんでペンキを塗るようにいたしました。

89 両手でつかんでというのは、何をつかむんですか。

噴霧器だったと思いますが、片手じゃ重いですから、片一方スイッチを押さなきゃいけない、持たなきゃいけないし、均等に塗らなきゃいけないので、それで両手でないとできなかつたそうです。

90 その仕事を何時ごろから何時ごろまでするんですか。

六時起床、それから食事をして、ずっと歩いて行って、工場に着いて仕事始めるのは八時からやりました。

91 で、何時まで仕事をしましたか。

冬は五時になったら暗くなつたので冬時間では五時まで、で、春とか夏、秋のような日の長いときは六時までやりました。

92 その間、立ったまま働くんですか。

座る暇も座るところもありません、全部立ってやりました。

93 その仕事をしていて、つらいことというのはどういうことですか。

第一おなかがすいて、それが一番つらかったです、それから、小さい体で大きな器械ですから、それを持って動くだけでも精一杯、それが一番つらかったと思います。

(以上 田邊直美)

94 ペンキのにおいに悩まされたということがありますか。

ペンキのにおいでやられまして、においが分からんようになり、ひどい目に遭いました。最近、また、病院に行ったら、どういう仕事をしたからこれだけ悪くなったかということ、手術もいたしました。

95 アルコールが入って苦しんだということはありますか。

ゆっくり入れればよかったんですけども、何も、子供で経験ありますので、どぼんと入れたら、しぶきが上がって、目に入ったそうです。それで、今もこちらの視力は半減しております。

96 今もそのために目が悪い。

今もほとんど見えません、手術をしなけりゃいけません。

97 工場で仕事の監督をするのはどのような人ですか。

工場の中では、男性で、帽章に、横に開いた棒が二本付いたり、三本付いたりした監督の方たちがやっております。

98 それは日本人の男性。

ええ、全部日本の男性でございます。

99 年齢はどれぐらいですか。

大変申し訳ありませんけれども、年齢からいくと、ちょうど判事様の顔ぐらいもおられたし、四〇代ぐらいの顔もありましたし、もうちょっと若い方もおられたように思っております。

100 その人たちが、あなたが仕事ができないとしかるというようなこともあったんですか。

やっぱり、幼いことで、慣れない仕事と、全然分からない素人なものですから、これだけ教えても分からんかということ、相当しかられたり、げんこつで頭も相当殴られました。

101 あなたは、仕事をするときには、どのような服装をしていましたか。

あの当時は、寮長ですね、この方を山添さんと言ったのですが、この方から紺色の上っぱりと作業ズボンをいただきました。また、その山添さんに対して、お父さん、と言いなさいとも言われました。

102 ズボンと上っぱりで、鉢巻きは。

鉢巻きをさせられました、真ん中は日本の日の丸でございます、両方に

は神風と、標語だったと思います、それがずっと鉢巻きに書かれて、常にそれを頭の中にたたき込むように言われました。鉢巻きをしておりました。

103 日の丸に神風と書いた鉢巻きをして働いていたと。

そうです。

104 寄宿舍、寮では、一部屋何人ぐらいで暮らしていましたか。

先輩は、大体、二年前の先輩とか一年前の先輩たちは、年の順で部屋をかわりました。一番上が一部屋、二番目が一部屋、一番若い私たちも一部屋で、大体七、八人ずつ泊まっておりました。

105 どれぐらいの広さですか。

六畳敷です。

106 に、七、八人。

はい。

107 寮長が山添さんという方だったということですね。

名字は山添、名前は三平ということですか。



108 その人はどんな人でしたか。

日本の方はみんないいんだというけれども、本当に、察長さんだけは、山添さんだけは、実の父親のように、大変私たちを大事にかわいがってくれて、本当の父親のような気がして、立派な人でした。

109 具体的に、山添さんとどんな話をしたというようなことを覚えていますか。

その中には売店がありましたて、万年筆、ノートあるいは便箋、切手などを売っております。あるいは、洗濯もせにゃいけませんので、洗濯用のせっけんなども必要だと言いましたら、そこへ全部書いて行け、金は今ないけれども、あとで給料でみなもらえらる、そのときにみんなもらうから、全部そこに記録をして書いていきました。

110 要するに、山添さんは、あなた方のことを親身になって心配してくれたと、そういうことなんでしょうか。

あの方だけは、いつも、ご苦労さんということと、大変よくしてくれました。

111 ほかに察にはどういう職員がいたんですか。

食堂にはたくさんのお従業員がおりましたけれども、その中で、若い兄さんで、通称エノケン、エノケンと言うたそうですが、この方には兄さんと呼びなさいと、もう一人、中年ぐらいの女性がおられました、この方にはお母さんと呼びなさいと言われました。

112 そのお母さんとかお兄さんとか呼ばれてた人たちは、山添さんのように親切にしてくれましたか。

その方たちは、いくら言うても聞きもしないし、ただ単に、早く行けば仕事しろと、早う行け早う行けと催促するだけが精一杯で、本当に善人とは思いませんでした。

113 寮から工場までは、どのよにして出勤してましたか。

四列縦隊で歩かせました、約三〇分かかりました。

114 四列縦隊で行進するんですか。

行進します。

115 歌を歌うんですか。

軍歌とか、そういうものを主に歌いました。

116 軍歌を歌いながら歩いて行ったということですか。

はい、軍歌を歌いながら行進しました。

117 帰りも同じですか。

ええ、行き帰り全く一緒です。

118 そのような時に、何か日本人の子供から、からかわれたというようなことはありませんか。

着くまでには両方にずっと並んでいたもので、右も左も見るとわけじゃなく、一心に工場に入って行きますと、中には日本人の人がおりました。それは、言うて言葉にならないぐらいに、大変ひどい目に遭いまして、本当に、こぶしで殴られ、あるいは、けられ、それはもう、本当に生き地獄のような気がいたしました。

119 私が聞いたのは、工場からの帰り道に、日本人の小さな子供から、からかわれたということがありますか。

朝は早いので子供たちに会いません。帰りは、ちょうど二年生、三年生、四年生ぐらいの日本の小学生ぐらいの子供たちから、朝鮮人のルンペン

とか、朝鮮人のばかというようにひやかされました。我々は、何でルンペンかと、正々堂々と働いているのと言うて、やっぱり幼い者ですか、つい走って行って手を出したりしたら、今度は逆に、こちらの監督からひどい目に遭ったことがあります。

120 工場の行き帰り以外に、外出するということができませんでしたか。

団体ではたまには行くんですけども、個人ではとてもじゃないけど、もちろん、出ても、金は一銭もありませんから、個人では一切出たこともないし、出られません、団体では何回か出たことがあります。

121 個人では一回も出たことはない。

全然出られませんでした。

122 食事について陳述書に書いてありますけれども、朝昼晩と、ご飯が一杯と少しのおかずを食べてたということですが、この工場と寮で出される食べ物以外に、何かを買って食べるということはできなかつたんですか。

第一お金がなくて買うことができないのと、第一道は知りませんので行くこともできません。工場でくれたもので、腹が減るぐらいの食べ物で、



めったにありませんでした。

123 日本にいる間に、肉を食べたことがありますか。

一切食べたことはありません。

124 魚は食べたことがありますか。

行った当時は、しばらくは、機嫌をとるためだったと思いますが、一週間に一度ぐらいは魚のようなものが出たと思います。出たら、お腹がすいてるから、どういう食べ方したのか、何の魚か、わけ分からなくて、かたっぱしから、まあ、月に一回ぐらいでね、当時は、週に一回ぐらいが、だんだんだんだん慣れると、月に一回ぐらしか出ない、だから、ご飯の出る前におかずが出たら先に食べてしまうから、中身はどういう魚だったか、それも覚えておりません。

125 そうすると、いつもお腹をすかせてたわけですが、何か、すいかの皮を拾って食べたということがありますか。

あります。

126 それはどのようなときですか。

帰って来るときに、道路脇にすいかの食べかすの皮が残っていましたが、寮長あるいは監督官の目を隠して、ぱっと、二つ三つ上っぱりポケットに入れまして、それを、一生懸命ほこりをふいて食べました。

127 それは、すいかではなくて、すいかの皮ですか。
すいかの皮です。

128 食べ物のことで、日本人の女学生から、非常に悔しい目に遭わされたということを覚えていますか。

あります。

129 それはどのようなことですか。

食事をするときには、日本の男性、それから、日本の女性が終わって食事することになっていて、ずっと列を並んで入るものですから、ひょっと、左側の脇を見たら、残りの残飯ですね、ご飯とかおかずのようなものがバケツに捨てられてるものですから、監督官の目を盗んでそれを食べたことがあります、食べることもできなかったのです、怖くて。

130 それを食べようとしたということですね、残飯を。

そうです。

131 そしたら、どういふことがありましたか。

バケツに手を入れたとたんに足で踏まれまして、上を見たら、女学生ですが、来ておったそうですが、このハントウジン、このルンペンと怒鳴られて、それで、上から足で力一杯踏んだもんですから、やっと手をそこでのけて、食べることもできなくて、ひどい目に遭うだけでした。

132 日本の女学生から足で。

バケツに手を入れたとたんに、上を踏みつけ。

133 手を踏まれたと。

そうです。

134 そして、ののしられたといふことですね。

そのときに、ハントウジンとか、ばかとか、この朝鮮人のルンペンとかいうように言われたそうです。

135 あなたは、一九四四年の終わりごろに、大きな地震に遭いましたね。

遭いました。

136 そのとき、あなたは何をしてみましたか。

昼ご飯が終わって、仕事に入って、約三〇分ぐらいして、地震というのも初めてでしたから、分かりませんで、驚きました。

137 あなたはそれまで地震というものに遭ったことがなかったんですか。

韓国ではほとんどないので、地震ということは、聞いたことも、味わったことも、体験したこともありません。

138 そうすると、地震がきたとき、何が起こったと思われましたか。

周りの監督の人たちが、地震、地震と叫んで、早く出てこいと命令されて、出ようとしたけれども、下の地盤が揺らいで、出ように出られなく、そのうちに、大きな家が崩れてきて下敷きになりました。

139 最初、空襲だと思った。

だから、地震という言葉空襲警報と勘違いして、早く逃げようとしたけれども、今度は地が揺れて、地震で揺れたもんですから、動きがとれなかったそうです、そのうちに倒れてきたと。

140 それで、あなたはけがをしたんですか。

旋盤の上に置いてあった機具類が全部肩にかかってきまして、それで、今でも肩を使うことができません。たまたま旋盤という機械で、腰も今大きな傷あとが残っていますけれども、化膿しまして、大きな傷がありましたし、たまたま旋盤があったから、旋盤の下に入ったから、身は崩れずにすんだと思います。

141 今、脇腹に大きな傷あとがあるようですけど、それは、そのときに旋盤に当たってできた傷。

旋盤に刺されて、それから、穴があいたんです。

142 それで、あなたは生き埋めになってしまったんですか。

生き埋めになってしまって、しばらくしたら、外で人の声がしたので、出ようと思っても全部ふさがっております、ちっちゃい穴があったもんだから、そこを手で掘ったら、もう、傷だらけで血まみれになったけれども、口が出るぐらいの穴を掘りまして、そこで、助けて下さいというようにおらびました。

143 そうしたら。

それから、男の衆が来まして、いろんな機具類を持って掘り出して、それがたまたま入り口近くだったから助かったと思います。

144 そのときに、あなたと一緒に来てた人たちで、亡くなった方がいますか。

二人亡くなりました。木浦、光州、羅州、それぞれあるんですけど、まず、羅州では二人死にました。

145 あなたと一緒に来た羅州の人が二人死んだということですか。

三年先輩の監督をしてる人が一人亡くなって、それから、同じ六年生の同輩が一人と、先輩の一人と同輩の一人ということ、二人亡くなりました。

146 それは、あなたのすぐ近くで亡くなったんですか。

地震の真っ最中に、ちょうど水が流れてる溝があるそうです、入り口のほうに。で、私と一緒に出えと、本人、梁錦徳さんが叫んだそうです、それから、先輩が、早くおいで、という声を出して渡ろうとしたときに、もう塀が崩れて、その川の中に落ち込んで死にました。

147 それが先輩のほうですね。

はい。

148 同級生のほうは。

私の後ろにおって、とにかく、もう、無我夢中で逃げる、早く来い、早く逃げ、早く来いと叫びながら、走って逃げようとするとき、ちょうど真後ろだったそうですが、こちらは、直接に当たって、即死の状態でした、同輩です。

149 崩れてきた。

崩れてきたものに下敷きになって。

150 直接当たったと。

はい。

151 その亡くなった二人の名前を覚えていますか。

三年先輩は崔貞禮、同輩は、当時創氏改名でしたから、金田武子さんです、これは同輩です、この二人です。

152 その二人が亡くなった。

そうです。

甲第九号証を示す

153 八〇ページの上の左側の写真、全羅南道羅州隊と書いてありますが、まず、この中にあなたがいますか。

前列の真ん中です。

154 何人目ですか、右から。

右から六人目です。

155 これがあなたですね。

そうです。

156 亡くなった二人もここに写っていますか。

崔貞禮は後列の左の一番端です。

157 金田武子さんは。

私の真後ろか、その右のほうの、どっちかと思えます。あまり小さいの
で見えませんが、私の真後ろか、写真で向かって右側のどっちかと思
います。

158 今地震の話をお聞きしたんですが、空襲警報で逃げたということもありますか。

工場の中にも防空ごうがありましたし、再々空襲警報がきました。察に帰ったときには、いつでも、防空頭巾と履物を用意して、いつでも出られるように用意をして寝るようにと、で、察に帰っても、やはり空襲警報がきたら、常に防空ごうに逃げたり帰ったり、それも大変でございました。

159 空襲警報というのは、大体、夜くるんですか。

真夜中の一時か二時か、ちょうど寝かかったときに、必ずと言っていいほど空襲がきました。

160 毎晩くるということですか。

毎晩のように。

170 空襲警報があると、どうするんですか。

空襲警報がきたときには、もう、防空ごうに逃げなきゃいけない。

171 実際に、近くに爆弾が落ちたことがありますか。

幸いなことに、私たちの住んでる寄宿舎のほうには空襲はなかったんですが、そのちに富山に疎開したそうです。疎開したのちに、そこ、空

襲があったそうです、元おった工場がですね。

172 富山では落ちたんですか。

富山のほうでは、田舎のほうで、察もちっちゃいし、まったくじゃないんですけども、ほとんど空襲警報はありませんでした。

173 空襲警報で防空ごうに逃げるとき、どんな気持ちでしたか。

防空ごうに入っていくときに、はあ、これで、うちのお父さん、お母さんにも会えなくて死ぬんだな、ということを思ったりして、中には、あんまりきつくて眠いので、寄宿舎に帰らないで、防空ごうで夜明けまで寝たこともあります。

174 あなたは、この当時、日本人の小学生は、都会から田舎に空襲を避けて疎開してたことを知ってますか。

寄宿舎から工場まで行ったり来たり同じ道で、荷物を持ったり、あるいは、カバン持って外を歩いたことありませんので、そういうのは会ったことありません。

175 知らないということですね。

分かりません。

176 撃墜されたアメリカの飛行機を見に行ったことありますか。

米機が墜落されたとき、これは米兵だから、敵だから、現地まで行きまして、相当遠くに行きました、ずっと奥に入って行きました。それを、つばをかけたり、敵だから足で踏みつけたり、そういうことをしなさいということ、みんなで行きまして、そのとおりに、死体を踏んだり、つばかけたりしました。あっちこっち分散されて散らばってしまいました。顔もよく分からなかったけど、米兵らしいものが二人おりました。その二人に、足で踏みつけたり、つばを吐きかけたりいたしました。

177 アメリカ兵の死体を踏んだり、つばをかけた^りしたと。それは、だれがそういうことをしろと言ったんですか。

何か、監督の方たちが、ほかの工場の人たちも全部で、どこでどう落ちたか分からないんですけども、みんなと一緒に行くということ、付いて行っただけです。

178 みんなで行って、そういうことをしろと言われたんですか。

そうです。

179 あなたは、そのとき、どんな気持ちで踏んだりつばをかけたりましたか。

当時は日本の味方です、日本人と同じでしたから、日本の敵であるアメリカ人を憎いということ、力いっぱい踏んで、つばかけて、敵はしっかり踏みつけてやろうというような、そういう気持ちでいっぱい行動して参りました。

180 そのあと、工場ごと富山に移ったということですね。

私らが寄宿舎に行ったときは、もう、大きな軍需工場が建っておりまして、だから、その中に入って仕事いたしました。

181 富山に行ったのは暖かくなってからですか。

だいぶ暖かくなってたと思いますが、それでも、五月、六月になるまで雪が残っているという所だったそうです。やっぱり地面をかけていったら、すごく冷たかったそうです。だから、夏は短くてすぐ終わってしまふそうです。

182 一九四五年の暖かくなったところに富山に移ったということですか。

少し暖かくなって富山に参りました。

183 富山では、今までと同じ仕事をしましたか。

そこでも同じように、飛行機の付属部品を洗ったり、そういう仕事をいたしました。

184 解放までそこで働いたわけですか。

解放になるまでそこにおりました。

185 そうすると、日本に一年半ほどいて、その中で辛かったことというのは、どういうことでしたか。

一番辛かったことは、まずお腹がすいたこと、もう一つ辛かったことは、女学校にやるといふことがなかなか行けなかったこと、そのうち来るだろう、そのうちだろうという、それが一番辛かったと思います。

186 うれしかったとか、楽しかったといふことはありますか。

ただ、幼い心で、工場から帰ったら、歌ったり、笑ったり、そういうこともいたしました。

187 あなたは一九四五年の一〇月二二日、戦争が終わってから二か月あまりたって韓

国に帰ったわけですね。

そのとおりです、二か月ほどして帰って参りました。

188 韓国に帰るまでに、給料をもらったことがありますか。

金、一円ももらえませんが、ただ、こういう小さい手をもってやったことも何もありません、毎日毎日こぶしでたたかれたこと、それしか残っておりません、このうつぶんをだれに晴らしていいんでしょう、私が働いた代金だけでも払ってください。

189 あなたの給料を貯金してある、というような話を聞いたことがありますか。

金が必要なもの、外に出ないので外で買うものがなくて、必要があれば、せっけんとか便箋を買うのは売店に行つて名前を書いたときなさいと、それでもらえると、だから、金は帰るときに全部あげるから、全部貯金をしときなさいと言われて、一銭ももらっておりません。

190 帰るときに全部あげるから、預かってくつというふうに言われたんですか。

預かっているかどうかは知らないんですけども、自分たちがごじょごじょしたことであつて、帰つて来るときは、金、一円も見たことございませ

ん。

191 日本に来るときのもう一つの約束は、学校に行くということだったんですけども、これはどうなりましたか。

女学校というのはいっ行きますかと、来月来月、聞きたんびに来月来月と、富山に行っても、じゃあ、ここへ来たらいっ行かれますかと、いつも来月来月で通したそうです。

192 韓国に帰って、お母さんと会いましたね。

終戦になって、二か月になって帰ってこないの、心配やらあれこれ、体を崩して、お父さんは亡くなりました。駅に迎えに来たのはお母さんだけでした。

193 お母さんとどんな話をしましたか。

その日は遅かったの、もう、そのまま寝てしましまして、のちに全部お母さんに話をしました。

194 お母さんから、勉強してきたかとか、お金を稼いだかとかいうことを聞かれましたか。

その後、あなたは結婚しましたね。

お母さんから、勉強をしっかりと、それから、お金もたくさん持ってきただろうと、多分、家が一軒買えるぐらいの金も持たせるということだったから、どうだったのと聞いたら、すべてがうそであったということとで、お母さんと抱き合って、本当に、時間のいくまで、いつまで泣いたか分かりません、ずっと泣きました。

戦後になって、日本の人たちが引き上げたのち、女学校に一年間、年長組として通っていました。それから婚約の話があったんですけども、勤労挺身隊と聞いたとたん、みな逃げてしまいました、だれも相手にしてくれなかったです。

(以上 田中なほ)

勤労挺身隊に行っていたと分かると、結婚を断られるということなんですか。

帰ったときに、身内がみんな来まして、いろいろと大変だったなと喜んでくれたり悲しんでくれたりしました、そのうわさがずっと散らばったものですから、日本で若い男と好きなことをしてきたらうということだけで、いいところもたくさん見合いやいろんな結婚の話ありましたけど、全部断られました。二一歳になって、隠れて全然知らないようなところで結婚いたしました。

二一歳になって結婚したということですから、普通は、そのころ韓国の女性は何歳ぐらいで結婚したんですか。

大体一七歳から一八歳、多いの、十八、九ぐらいが一番多かったと思います。

あなたは二一で結婚したんですけれども、その相手の方には勤労挺身隊に行ったというのを隠したままだったんですか。

いや、言うたこともありませんし、分からない。ですから、分からなかったから私を連れていってくれたと思います、つまり嫁にもらったと思

います。

199 御主人はもう亡くなってようですけれども、亡くなるまでこの話は隠していたということですか。

嫁に行った村でも一切そういうことは口に出しませんでしたから、分かりませんでした、分からないまま亡くなりました。

200 あなたは、今体の調子はどうですか。

今、薬でどうにかこうにか生きてるようなものですが、夜になると頭を針で突き刺すように、地震の後遺症だと思います、刺すようにして痛い、あるいは肩もそうです、重いもの持てません、体全体を針で刺すような、例えば、雨が降ろうとする、そういう気圧の関係で雨が降る前にも全身を針で突き刺して、薬を飲まなければ体がもてないような状態が今続いております。

201 最後にお聞きしたいんですけれども、日本政府は、あなたを含めた勤労挺身隊に行った人、あるいは強制連行された徴用された人、それから、いわゆる従軍慰安婦にされた人に対して個人的な補償はしないというふうに言ってるわけですか

ども、このような日本政府に対してどのような思いですか。

私の体は今病しか残っていません。ただ、補償うんぬんでなくて、私が一年半働いた金、貯金をしてあるならばその利息も相当あったはずですから、今までかかった利息も全部加えた一年半の給料を払ってください、私はほかに自分の補償してくれと申しておりません、ただで若い青春時代を棒に振ったことが悔しくてたまりません。

あなたは、校長先生とか憲兵があなたに約束したことを果たしてほしいと、そういう気持ちなんですね。

そのとおりでございます。偉大なる判事様に申し上げます。日本に来て一年半働いたこと、その対価そのものを望むんであって、そのほかは望みません。釜山のほうにもいろんな施設うんぬんありますけれども、それも自分には関係のないことであり、ただ残るといふのは、日本に来て、日本のそういう監督者たちからこぶしで朝から晩まで殴られ通して通してきた、その恨みまでは言いませんけれども、自分の対価まででも、どうにか、自分の働いた一年半の分だけでも利息を添えまして下されば、

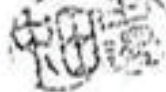
偉大なる判事様の御配慮をお願いしたいと思ひます。遅くなつたし、時効とかいろいろ、そういううんぬんもあるんですけども、あなたたちの子供たちがもしよその国へ行ってこういう目に遭つたらどう思われますか。三か月十日、つまり一〇〇日間もさけば、あるいは苦勞したことを申し上げたいんですけども、判事様をはじめたくさんの人たちが、ただ私一人のために、これだけ暑い目に遭いながら一生懸命してください。その姿を見たときに、これ以上は申し上げませんが、どうか判事様のほんとに心温まる御配慮のほどをお願いいたして終わりたいと思ひます。

(以上 田邊直美)

山口地方裁判所下関支部

裁判所速記官 田邊直美

裁判所速記官 田中なほ



[→HOME](#)